

## 日本学術会議の在り方に関する専門調査会(第13回)

### 議事録

1. 日時:平成15年2月20日(木)14:00~16:00

2. 場所:中央合同庁舎第4号館第1特別会議室

3. 出席者:

(議員・委員)

井村裕夫会長、黒田玲子議員、阿部博之議員、大山昌伸議員、  
薬師寺泰蔵議員、市川惇信委員、江崎玲於奈委員、久保正彰委員、  
塩野宏委員、田村和子委員、中根千枝委員、益川敏英委員、  
三井恒夫委員、山路敬三委員

(事務局)

大熊政策統括官、上原官房審議官、永松官房審議官、和田官房審議官  
三浦参事官

4. 概要:

(1)「日本学術会議の在り方について(最終まとめ)(案)」について

【井村会長】 第13回「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」を開催します。この調査会の会長でした石井議員が、総合科学技術会議議員を退任され、私がおの後を受け会長に指名をされ、本日の議事の進行を務めさせていただきます。また総合科学技術会議の桑原議員、白川議員も退任され、新たに阿部議員、大山議員、薬師寺議員が就任をされたので、紹介します。

本日は、細田大臣も御出席をいただいておりますので、最初にごあいさつをお願いしたい。

【細田大臣】 皆さんこんにちは、本日は第13回の「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」ですが、お忙しい中、何回もお集まりいただき、心から感謝申し上げます。この専門調査会ではさまざまな角度から、日本学術会議の在り方について御審議いただいたわけですが、本日は最終的なおとりまとめをいただければと思います。

何分幅広く、長い歴史・伝統を持つ、この日本学術会議です。学会の中に現在の在り方、その他、いろいろな問題があることは共通の認識としてありますが、その中でしかるべき現在の対応策をまとめていただき、今後行政も

政治も、企業、産業もどこも改革を進めるということですので、学会の方もその改革の心で常時取り組んでいただきたいという願いで一杯です。そういう中でこの難しい問題にお取り組みいただいた先生方に心から感謝申し上げ、また今後も長期にわたっていろいろな意味で見直し等を行っていくことを、私も努力しますこととお誓い申し上げます。

本日はありがとうございました。

【井村会長】 大臣、どうもありがとうございました。

【井村会長】 それでは、事務局から資料の確認を。

【三浦参事官】 (資料1～3について説明)

【井村会長】 会議資料は、前回議事録(案)も含めて公表とさせていただきます。

それでは、最終まとめ(案)について、これから御審議をお願いしたい。この調査会では、平成13年5月から12回にわたり、日本学術会議の在り方に関して議論を重ね、昨年11月に会員制度や組織・機構等の改革に関する中間まとめをとりまとめた。それに対して、広く国民の意見を募集し、それらを参考として検討をした。更にまた設置形態についても、前回議論をしていただき、今回「最終まとめ(案)」というものを作成した。この案について、検討をいただき、できるだけ固めてしまいたいと考えています。

事務局から、この「最終まとめ(案)」について、中間まとめから追加・変更のあった部分などにつき、説明をしていただきたい。それでは、資料1について説明をお願いします。

【三浦参事官】 (資料1にそって説明)

【井村会長】 資料1でアンダーラインのところ、手を加えたところ、書き換えたところ。本日は順を追って御意見を伺っていく。1ページの「I はじめに」は、元はなかったのを加えています。なぜ学術会議の在り方を総合科学技術会議が決めるのかという疑問の声も出てますので、法律で決められていたのでやることになったということを書いています。

次に、今までの経過、特に外国のアカデミーの状況を調べたり、中間まとめをしてパブコメを求めたということが書いていますが、このIの経緯、IIの最終まとめの骨子、この辺りについてまず御意見を伺いたい。

【江崎委員】

今日出てまいりまして、検討違いのことを申すかもしれませんし、間違っ

いるかもしれませんが、一般的に考えまして、日本だけじゃなく、世界のアカデミーは危機に瀕していると思う。昔から学問というのはトラディショナルカルチャーで、シニアのプロフェッサーの知見というものが非常に重要である。ところが、下剋上という言葉がいいかどうか分かりませんが、科学技術の進歩というのは若い人たちの方がいい知見を持っている。そういう人たちに耳に傾けざるを得ない。つまりシニアの人たちの意見の効力が限定される時代になってきたということが、まず一点です。ですから、大学でも、コンピュータを非常によく扱えるのは若い学生か若い先生であって、シニアの人たちはITについて不得意であるなど、それが一例です。人文・科学はちょっと違うかもしれませんが、ここに人文・科学の大先生がいらっしゃるから、御意見を聞いたらいいいと思うのですが、我々の分野では、大先生がこうして集まって議論しても、余りいい結論は出てこない。ナショナルリサーチカウンセルみたいなものは、学問の進歩が早いだけに、その必要性は今までより以上高まってきたということが1点、そういう矛盾があるということです。

もう一つは、学士院と言いますか、ナショナルアカデミーというものは、非常にナショナリズムが濃い組織が多いわけです。ところが学問の進歩はそのナショナリズムを越えなければいけない。そういうインターナショナルなバリアーがないところに学問が発展するわけです。ここにも当然そういうことが書いてありますが、世界とコアポレートして世界と競争する、コンペティションとコアポレーションがうまく結べるような組織、そういう学士院のような組織の必要性はより一層あるが、現在の組織は多分そういう要求は満足させてくれない。これは、国際的な問題だというとならえ方が必要だと思う。

【井村会長】 ありがとうございます。おっしゃる問題は、非常に大きな問題で、この新しい学術会議には国際的な学問の交流というのも大きな眼目の1つに取り入れているわけです。

【江崎委員】 もう一つ、例えば韓国に科学技術アカデミーがあります。これはいろいろあると思うのですが、自分たちは700人のメンバーだといっていますが、しかし500人は実は外国、アメリカにおけるメンバーです。韓国はそういう自分たち韓国人のコミュニティを通じて外国からのインプットをどんどん取り入れてます。そういうことも大事です。

【井村会長】 全体的、総論的な視点で大変重要だと思いますが、これは書き込むかどうかはちょっと考えさせていただく。

【江崎委員】 それは構いません。

【井村会長】 ほかに何かございますか。

【三井委員】 大変よくまとめていただき、方向性として当面は国の特別の機関の形態を維持し必要な改革を進めるということでした。その過程において、いろいろ出ました意見、方向性がよく書かれています。最初に最終まとめの骨子ということで書いてありまして、2ページの〇の一番最後が結論だと思いたいますが、ここでは、14ページのところの当面の形が、特に明示してない。これはもう少しその辺をあらわした方がよいと思う。

と同時に、欧米主要国のアカデミーの在り方は、理想的な方向と考えられると書いてあり、これは後の方にもそう書いていますが、果たして理想的なのかどうか。現実には、この5ページでは、設置形態について諸外国の事例も参照にしつつと書いてある。まさに参照にして検討した。したがって、例えば co-optation は取り入れたが、栄誉授与機能、これは諸外国では持っているけれども、そういうものは持たない方がいいとなっている。あるいは、研究助成機能を諸外国では持っているが、これは持たないと書いてあるわけで、必ずしも欧米のアカデミーが理想的であるかどうか。ちょっと書き過ぎではないかと思う。

欧米のアカデミーを参考にして、我が国の実情に照らし、いかなる姿が理想的かを検討するのであろう。この10年以内に科学技術の進捗状況を評価して、より適切な設置形態を検討する際には、日本にとって理想的な形態がどうであるかを検討することではなかろうかと思うので、一言申し上げる。

【山路委員】今、三井委員が最後に言われたことに私も賛成であるし、その〇の中の10年以内に改革の進捗状況を評価し、より適切な設置形態の在り方を検討するということは、これは非常にいいことだと思う。

こういった組織は、万古不易なものでなくて、いつも理想を求める。あるいは、そのときどきの必要とするところを入れていくことが大切だと思うので、こういうことを書いていただくことは、非常にいいことだと思う。私は賛成である。

【塩野委員】今の点は、13ページのところと関係してくると思うが、13ページでは主要国のアカデミーの話が出ているのと同時に、この点にかんがみれば理想的な最終的理想像としてはという形で書いてある。これを受けて、前の方が書かれているというふうに私は理解をしている。

前の部分は、今日初めて出てきた議論ではなく、既にここで十分議論したものが前の方に残っているので、前の方を改めるのであると、13ページをもう一度最初から議論しなおさないといけないというのが私の理解です。

【井村会長】あとでもう一度13ページ辺りを議論いただこうと思いますが、前回

この辺りで、全員とまではいかななくても、かなりの人の合意が得られているのではないかという気がします。だから、理想というところまでは言えないかもしれませんが、やはり自主的な運営ということが1つのモデルになると考えて、こういう文章になったと思う。したがって、文章については、もう一度検討をしたいと思うが、精神はそういうところにあるわけで、その辺は変えることができないと考えていただいてもいいのではないかと思う。皆さんがもう一度議論しようというのなら、それはまた別の話ですが。

それでは、次は3ページにすすみます。ここは学術会議の在り方に関する基本的な考え方の部分で、石井前会長の時代にかなり議論をしていただき、相当決めていただいています。若干追加しているところや、変更しているところがあり、それがアンダーラインの部分です。御意見があれば伺いたいと思う。

【市川委員】 5ページが一番上ですが、確かに co-optation の方式が望ましいという議論でした。しかし、co-optation が単独で取り出された場合、望ましいかどうかは、かなり考えなければならないと思う。といいますのは、10年間の暫定的とは言え、国の特別な機関として置くことになった。特別な機関として国からの財政的な手当を受け、新会員は現在の会員によって co-optation により選ばれる。こうなると、サイエンスコミュニティの人々あるいは団体が、関心を持ち続けるでしょうか。現状よりもむしろ関心が減るのではないかと思う。なぜかと申しますと、現状は学会から候補者が推薦されて、その候補者の中から会員を選ぶ選挙人が学会から出ているという状態であり、それだけ日本学術会議へのコミットがある。今度は、候補者については、学会からの情報を得るのかもしれませんが、あるいは、連携会員が学会との連携をお考えになるのかもしれませんが、その基本的なところで、日本学術会議は従来よりサイエンスコミュニティから離れた存在になりかねない。そうしたときに、科学者コミュニティの代表機関という性格に、若干の影が差すのではないかと考えられる。裏返して言えば、離れていくかもしれない関心をつなぎ止める別の方策、これは 12 ページに個人または学会等からのサポートとありますが、関心を持たざるを得ない環境というのを実現しておく必要があると思う。

【井村会長】ありがとうございます。そういう恐れはあり得ると考えており、したがってすべてを業績だけの co-optation で選ぶわけでない仕組みにし、とくに新しい分野とか、融合領域とか、いろんなどころから選べるような仕組みを考える。あるいは、女性とか、地域別の考慮とか、幾つかの考慮をしないといけないだろうということです。そのときに学会推薦も参考にすることになると思いますが、ここはかなり石井前会長もこだわり、この方法がいいとお決めになったわけです。

だから、基本的にこの方向でいきたいと思いますが、今、市川議員おっしゃ

ったように、私も一定の会費制を導入するとか、そういうことは必要だろうと思う。

【江崎委員】先ほど私が申し上げたことと関係しますし、今、市川議員がおっしゃったことも関係しますが、欧米のアカデミーというのは、必ずしも理想ではない。これから新しくするのでしたら、それを越えたものをつくるべきだと思う。欧米主要国のアカデミーの在り方は、理想的と考えられるなんてことは、これは変えられないかもしれませんが、ちょっととんでもない書き方に思う。その典型が、co-optation です。学者というのは自分の弟子を教授にしたがる傾向にあります。それは絶たなくてはならない時代になってきている。ですから、これをまねする必要はないわけです。

現在、サイエンティストのパーソナルファイルのようなものがあり、これにするべきだと思う。co-optation は、温故知新というものを信じる限りはいいのですが、10年後新しいものをつくる場合には、こんな古色蒼然たるものは捨てるべき時代に来たように思う。

最初に申しましたように、今まで来なくてこんなことを申し上げるといのは、大変失礼かと思いますが。

【井村会長】 御承知のように、学術会議は最初選挙にしたわけです。そうすると激しい選挙運動が起こり、それをやるところしか通らないことになり、次は学会代表にしようということにした。そうすると、今度は学会間の勢力関係が問題になり、結局学会の有力な人でないとなかなかないという傾向になってきたため、サイエンティフィックなメリットを考えて、co-optation にしようということになった。

だから、co-optation をどういうふうに理解するかということにもよるが、今のところそれ以上のいい方法が思い浮かばなかったということがあると思う。

【江崎委員】 しかし、例えばセレクションコミッティみたいなものをつくり、新しいセレクションコミッティがやればサーチコミッティということになりますが、そのような会員選出方法は co-optation とは全然違います。

【井村会長】そうですが、本文の co-optation とは会員がサーチコミッティをつかって、次の会員を選んできるという意味で書いたわけです。

【江崎委員】なるほど。

【井村会長】それから、確かに欧米のアカデミーは理想であるというのは、ちょっと言い過ぎかもしれませんが。ただ、日本は学士院も学術会議も両方とも政

府機関になっていますが、外国は自主独立という面でははるかに進んでいるところが多いわけです。勿論長い歴史もあり、それだけにまたいろいろな問題も内包していると思うが。

【江崎委員】 日本では、そういう保守的な古色蒼然たるものも存在するわけですから。

【塩野委員】 今の関係ですが、2ページの問題になっているところは、私の理解は最後の設置形態の在り方にかかってくるわけで、co-optation がどうか、選出方法がどうかであるとかというのは、ここで言っているわけではないと思う。

私も前回、あるいはずっと前から更地で図を書けば独立した法人になるだろうということを何度も言っていました。それは何も欧米がそうだからというのではなくて、行政法、組織法論から見ればそうだとことです。

ただ、欧米ではこういった設置形態が取られており、それを一応私の理想と一致させて、理想と呼んでいるだけの話で、co-optation とかとは、ここは関係ないということを明らかにしておく必要があると思う。

【山路委員】 2つ申し上げたいと思う。3ページ、4ページ辺りに、助言という言葉が4つぐらい出ているが、そのあとはみんな提言になっている。助言をやめて全部提言にした方がよろしいと思う。字引を引くと、助言というのは、傍観者的に横から手伝ってやるというような、脇から助けになることを言ってあげるということであり、傍観者的すぎであるし、更には上に立って言うような感じもしてよくないと思う。提言にするのがよろしいと思う。

中間まとめに対する外部の方の意見を拝見すると、ほとんどが研究者とか学会関係の方だが、その中にちらほら会社関係の方が入っている。そういった方は、科学者コミュニティの果たすべき役割の文章の辺を読むと、科学者の良心が感じられないということを言っている。そういう観点で最終まとめ案を見たが、今度はそういう点が非常に薄くなって、科学は両刃の刃であるということもはっきりとさせているような書き方であり、科学者がすべてをリードするようなニュアンスも減っている。ただ、この助言というのだけ変えていただければよいと思う。

もう一つの話だが、それは4ページの役割、機能①、②、③の順番である。そもそも行政改革会議で、この学術会議の改革の論議が出て、専門委員会を総合科学技術会議の下につくって議論することになった。そのときの討論を見ると、一番大きいクレームは、「政府からこういうことに関して答申しろというような質問をしてもなかなか出てこない、あてにならない機関」だということであつたと思う。そうすると、現在のテーマとしては、まず政策提言機能が第1で、

その次が社会へのコミュニケーション機能であり、この二つの機能に対しての基本となるのが科学に関する連絡調整機能になるのではないかとと思われるので、この順番を変えた方が今の目的に合っているのではないかと思う。

経緯からすれば政策提言機能を一番目にして、次に科学に関する連絡調整機能か、あるいは社会とのコミュニケーション機能を入れていく方がよろしいと思う。

②の政策提言機能が非常に重要であり、それを強化するための改革だということ、この文章の中でも見せた方がよろしいと思う。

【井村会長】 ありがとうございます。ほかに何かございますか。

【江崎委員】 ここで科学者コミュニティという言葉がある。最近の1つの特徴としては、サイエンティストのコミュニティのほかに、エンジニアリングのコミュニティが非常に大きくなっている。例えば、アメリカのナショナルアカデミーにもサイエンティストのほかに、今から30年ぐらい前、ナショナルアカデミー・オブ・エンジニアリングがつけられた。それからクリニカルを含めてメディスンの分野が大きくなっている。現在の学術会議に7分野あって、旧帝大の分け方で、人数も30人ずつで構成されている。科学者のコミュニティということ論ずるなら、工学の世の中におけるウェイトよりも相対的に小さいわけですし、エンジニアのコミュニティ、あるいは最近非常に大きくなっているメディスン、お医者さんのコミュニティも、問題点としてとらえる必要があると思う。学士院におきましてもエンジニアの割合は非常に少ないわけです。今までどおり科学者のコミュニティの交流をよくするだけでは、私は十分ではないように思う。

【井村会長】 そこは若干議論があったと思う。特に、日本工学アカデミーというのが、純粹に民間の機関で、それとの関係をどう考えるのかが、1つ問題だろうと思う。医学の方に関しては、今のところは日本医学会がありますが、工学アカデミーほど独立した形ではなく、学会の連合体のような形のもので。これから、それらとの関係をどうするのが問題だと思いますし、特に工学アカデミーについては若干議論が出たと思う。

しかし、今回は今の学術会議をそこまで分解するのも難しいということで、このままの形にするかわりに、今の7部制をやめて、2部制もしくは3部制ぐらいにしたかどうかということが提言に書いている。

【三浦参事官】 科学者コミュニティという言葉遣いが誤解を招きやすいと思いますが、それについては議論があった。3ページ目に「人文・社会学を含めた科学技術者のコミュニティ(以下、科学者コミュニティという)」という定義を入れてますが、本来、科学者コミュニティという言葉の中に技術者も入っていま



すが、表現が熟しておらず、技術者の方も十分合わせてコミュニティを考えるべきだという御議論が、桑原前議員からあった。そういうわけで言い換えでこうさせていただいており、技術者の方も等分に重視して議論がされたという経緯があります。

【江崎委員】 私は、科学技術コミュニティで科学者と技術者を一緒にする議論は間違いだと思いう。科学者と技術者は、価値観も違うわけで、当然違ってしかるべきです。そういう意味で科学者のコミュニティとエンジニアのコミュニティは違ってしかるべきであり、それがナショナル・アカデミー・オブ・エンジニアリングが存在する1つの理由です。

【井村会長】 おっしゃるようなものは、確かに1つの在り方、考え方になると思うが、国によっては例えば人文系と自然科学系を分けているのもありますし、いろんな分け方が可能だろうという気がします。

今までいろいろ問題はあったかもしれませんが、一応人文・社会科学から自然科学、医学までの1つの組織体としてやってきたわけですから、こういう形で更にもう少し続ける方がいいのではないかということ考えたわけであり、将来的にこれがどういうふうに変わり得るようになってくるのかは、これからの課題になると思う。

【三井委員】 私もエンジニアなのですが、江崎先生は大変重要なことを言われたと思う。この専門調査会でも議論があって、もう少し工学系会員を増やせという意見もあったと思うが、今、学術会議がねらいとしているところは、井村先生がおっしゃるように人文科学系と自然科学系を含めた、俯瞰的な立場というところに特徴があり、ここに重点を置いていますので、当面はこれでやって、10年後見直すときに科学技術の全般的な観点から考えていただいたらいいのではないかと思う。

【井村会長】 山路委員、いかがですか。

【山路委員】 私も、工学アカデミーに属している。工学アカデミーは社団法人だが、窓口が学術会議になっており、学術会議の下にあるというような形を取っている。工学アカデミーは、学術会議の手の届かない専門分野を中心に、大切な活動をしているが、やはり会費だけだと資金が足りないということがあり、今度アカデミーの在り方を検討するときには、個別のアカデミーの有在り方まで検討のテーマに含めていただければと思う。

【井村会長】 次は IV、5ページからです。「当面の改革案」、これは大きく変

わっているところは少ないと思う。アンダーラインのところは比較的少なく、ここはかなり今まで議論したところになる。具体的機能の順番の変更ということは、先ほど話があったところです。ここはよろしいですか。

それでは、次に「設置形態の在り方」Vと、更に VI の「改革の推進」の項です。前回の会合で議論したことを踏まえ、そしていろいろな意見を参考にして、このような形でまとめています。それにつきまして、御意見を伺いたい。

【市川委員】 13 ページの一番下の○の5行目からの「なお」以下ですが、これは総合科学技術会議の見識において削除すべきだと思う。「社会的に尊重されない風潮があること」、これはある意味で総合科学技術会議が社会を何となく見下した表現になっている。ところが、現実には日本の学術のかなりの部分は、社会からのお金すなわち税金によって研究をやらせていただいているわけです。それに対して、政府機関からの提言でないと、社会的に尊重されないという認識を、総合科学技術会議が持つことは、私は適当ではないと思う。確かに、この場でそういう御意見がありました。それは個人の意見であれあるいはその個人の背後にあった特定の機関の意見であれ、私は少なくとも科学技術に関しての行政、政策決定に責任を持っている総合科学技術としては、そういう意見は極端なことを言えばたしなめる必要があると考えている。更に、寄付等の民間からの資金の確保の見通しが立たないと言っていますが、今まで日本学術会議はファンドレイジングをやってきたのでしょうか。ほとんどそういう努力がないわけですから、これは単なるスペキュレーションにすぎない。今度ファンドレイジングの達人であるトーマス・ブリンという人が来て、その努力を聞きましたが、例えばユニバーシティー・オブ・ペンシルバニアでは、2001年に10万通の手紙を出して、手紙を出した先に1週間後に必ず電話を入れて、そのレスポンスによってデータベースをつくるという大変な努力をしている。外国の人も黙っていて金を出さずというわけではない。こういうスペキュレーションを持って今後の設置形態の理由とするのは、我々としては見識が問われる話ではないかと思う。更に言うならば、この「なお」以下3行を削除しても、14ページの文章に文脈としてつながっているから、これは是非削除をお願いしたいと思う。

【井村会長】 ここは私も読んでいて引っかかったところですが、ここでの議論をかなり忠実に表現したのではないかと思う。市川先生の提案について御意見があれば伺います。

【田村委員】 全体として良くまとめていただいたと思う。市川先生の言われた部分は、私もなくてもいいのではないかと読んだ。

今の日本で10年後に見直すというのは、見直さないのと同じでないかと、

一番がっくりしている。この方針で行くなら日本学術会議自体が相当な決意を持って改革に取り組み、科学技術者を総体とした科学者コミュニティの機能のまとめ役として大きな力を発揮して頂かなくてはならないと思う。出来る事をやってみて、社会が認めてくれたら組織を変えるというような事ではとても違うのではないか。自ら改革していくことが重要ではないかと思う。その意味では 13 ページに最終的にあるべき姿が書いてあるので、そこに向かって学術会議自身、或いは科学者コミュニティ自体といいかえたほうがいいのかもかもしれないが、科学者の総体がこの学術会議をどういう風にしたいと思っているのかをきちんとつかんで具体的な改革の方向を打ち出して欲しい。そうでないとこの委員会の長い議論も役に立たない。国民の立場からも日本学術会議には心してもらいたいと感じた。

【井村会長】 どうぞ、益川委員。

【益川委員】 最後の段落のところですが、政府の機関からの提言でないと社会的に尊重されない風潮があるとか、寄付ということがありましたが、実際にこれはシステムとして、社会的な構造が違うから、あるアナロジーで、アメリカでこうだから日本でこうだという議論は成り立たないと思う。

【井村会長】 どちらの方ですか。

【益川委員】 実際には寄付です。寄付については、明らかに日本とアメリカでは税制が違う。だから、それはそういう趣旨で書いていただければ、書けるのではないかという気がします。日本の今の体制のままで、民間の寄付に頼ったらいいいという乱暴な議論は成り立ちません。

【井村会長】 そういう議論は、実はここではほとんどしてない。政府の一定の支援が必要だということは、ほとんどの人が認めているわけで、そうでないと活動はできないだろうと考えてます。ただ、形式が法人であるのか、政府機関であるべきなのかということで意見が分かれたわけですから、今の点で民間であるべきだというのは一度も出ていないと思う。

ただ、やはり会員は自分たちでもこれからはドネーションをやっていかないと、すべて政府からお金をもらっていくというのではだめだろうということはあって、そういうことがここに書き込んである。

【益川委員】 ここで「民間からの資金の確保の見通しがたたない」という言い方をされているが、それはそういう皮相的な事柄ではなく、背景にある社会の構造というか、税制とか、そういうものに違いがあるのであって、これだけ言う

と少し問題があると思う。

【井村会長】 この書き方は少し考えることにしたいと思う。ただ、私は税制だけではないと思っています。それは日本人の今までの考え方、公に対してどういうふうに個人がコミットしていくかという考え方が、かなり欧米社会と日本で違うところがあると思う。勿論税制も1つの要素であるのは間違いないと思うので、ここの書き方は少し考えたいと思う。

それから、政府機関からの提言でないと社会的に尊重されない風潮があるという言葉は、抜いた方がいいという意見が出たのですが、よろしいですか。

【江崎委員】 これは私も抜いた方がいいと思う。これはとんでもない文章で、これは絶対にやめるべきだと思う。

【山路委員】 私も必要ないと思う。

【井村会長】 そうですか。

【山路委員】 12 ページの一番上の「財務運営」、「学協会または科学者が日本学術会議の経費や人員の一部を負担することにより運営を支援する仕組み」というのは、これは会費を取るといふようなところまで含むのですか。

【井村会長】 そういうことを含んでいると思う。

【山路委員】 わかりました。大変いいと思う。

【井村会長】 例えば、ロイヤルソサエティーなんかは取っておりますし、小さなアカデミーですけれども、アメリカン・アカデミー・オブ・アーツ・アンド・サイエンスのメンバーに私は選ばれていますが、定期的にドネーションをしております。パブリックなコミュニティというのは、やはりそういうものでないといけない。そういう方向に持ってく必要があるだろうということです。

【塩野委員】 最後の文書を削除をしますと、前の方の「社会や科学者コミュニティの状況等に照して」について、何の説明もなくなります。今の「なお」以下の意見については、確かに私個人は前からそういう御意見に対してはおかしいという意見を申してましたが、やはりこういう意見もあって、社会状況の1つの説明になっていると思う。

なかなか書き方が難しいところだと思う。この社会や科学者コミュニティの状況等に照してというのは、何のことだかわからないということについての答

えにはなりません、こういう点もこの専門調査会という公の機関で発言があったという事実を軽々に無視するわけにはいかないと思う。それは恐らくいろんな背景、今までこういった問題について活躍をしてこられて、非常に苦労してこられた方の一つの叫びではないかというふうに受け止めました。ですから、理論的に見てこれがおかしいとか、あるいは自分のイデオロギーから見てこれはおかしいとって、一言ではね付けるわけにはいかないと思う。

ただ、私はいかにも適切でない考え方だと思うので、そのまま表現するかどうかは、別問題ということになります。そこは会長に適切な文章表現をしていただければいいのではないかと思います。

【井村会長】 なかなか難しい宿題が出ましたが、いかがですか。

【三井委員】 この辺は私がかかなり発言をしました。言いたかったことは、日本の国民が学術を尊重していない現状にあるということが、いかにも残念であるということです。国民が学術を尊重するように学術が何であるかをよく知らせる必要があるということがベースにあります。例えば民間のシンクタンクが発表するものと、国の機関が発表するものとの間には差があり、国の機関には、それだけの重しがあるということを示し上げたわけです。言葉の表現は会長にお任せする。

【山路委員】 むしろそこは、そういう風潮があるようだけれども、新しい日本学術会議が3つの役割、機能をきちんと果たして行くことによって、これを是正していけるというような積極的な書き方がいいと思う。

【井村会長】 風潮があると書くと、これは大きな問題になりますから、この書き方は考えさせていただく。

【江崎委員】 そうでないケースもあると思う。

【井村会長】 そうですね。

【江崎委員】 風潮という言葉自身が私は若干抵抗がある。例えば、ノーベル賞というものを考えても、全然政府のサジェスチョンと関係ないノーベル賞が多くあるということは、例えば田中耕一さんなんかは政府と関係ないし、私自身のノーベル賞も政府から一銭もお金もお墨付きがなかったわけですから、そういうケースは多くあるのではないかと思います。

【井村会長】 そのとおりで、日本の国民は、一般的には科学というものをア

プリシエートしています。

【江崎委員】 それから先ほど申しました工学というセンスを入れ、またいろんな日本のベンチャーというものを考えますと、例えばソニーにしても、政府と関係なしに発展したわけですから、もう少し科学と技術という広い見方でしていただいた方がいいと思います。

【井村会長】 では、ここは預からせてください。それ以外に、何か。

【市川委員】 14 ページの一番上の○に関して、2つ申し上げたいと思う。

最初の行の「国の特別の機関の形態を維持するとともに」、これに関連してですが、いろんな文脈があり、こういう形態にする事情は理解できますが、やはりこれまでの議論を踏まえますと、どうしても申し上げたいことが2つあります。

日本学術会議の歴史を見ますと、13 期だか 14 期だか正確なところは覚えていませんが、会員の選出方法について、事の善悪は別として政治からの介入があった。更に、今回の日本学術会議に関する議論が始まった筋書きは、行政改革の一環として取り挙げられたことにあるわけです。すなわち、国の特別機関である限りにおいて、そういう形で国の介入というものは本質的に避けられないわけです。更に、10 年後見直すということが謳われています。サイエンスコミュニティの代表機関というものが、本当にこのようなか弱い立場でいいのかということであり、サイエンスコミュニティとして心配なところです。これが第1点です。2番目は、この形態は本当に学術会議の中の有識者の方々が望んでいる姿なのかということです。お手元に『日本の計画』というブックレットが配られてますので、37 ページをごらんいただきたい。『日本の計画』を編集なさった会員の方々の名前が出ており、その方々の御見識の集成であると思うが、37 ページの図を見ていただきますと、21 世紀からは政府・民間・科学者というものが、3つで鼎立する格好になってます。その下には大きな絵が書いてありますが、科学者コミュニティが、政府あるいは民間と同等の立場でもって学術を通じて社会に貢献する絵になってます。こういう認識を持っていて、それで国の特別機関というのは、どうにも私の頭の中ではつながらない。勿論いろいろ牽強付会することはできるとは思うが。本当にこれは日本学術会議、その中のアクティブなメンバーは望んでいることだろうかという疑問があります。是非これは 10 年後の見直しのときに、真剣に議論していただきたいと思う。

次は 10 年後の見直しに関してですが、これは三浦参事官から念押しがありました。さらに強調しておきたい。今回のように総合科学技術会議にその処置を預けるというようなことは決してないようにしていただきたい。なぜかと申しますと、総合科学技術会議には、制度的には職務上とはなっていませんが、

事実上職務的に日本学術会議の会長が入っています。これが話題になったときの議事録を拝見すると、ご発言もごさいます。裁判にたとえると、検事あるいは被告が裁判官に加わったような話になっているわけで、参考人として供述することは十分あり得る話ですが、審議に加わるのはいかにも通らない話ではないかと思う。そういうことと無縁の評価主体というものをつくっていただきたい。

【井村会長】 昔の科学技術会議には、日本学術会議会長が加わるということになっていました。ところが、総合科学技術会議になって、「国の行政機関の長」となったわけです。学術会議の会長以上にサイエンスコミュニティを代表できる人が、国の行政機関の長としているかいないかということになると、なかなか難しいということで、そのときはやはり今のような問題が出た。それで、学術会議の在り方を議論するときには参加しないという条件で学術会議の会長に総合科学技術会議のメンバーになってもらいました。

この間は、実は議論する予定ではなかったのですが、突然議論が出てしまいました。議事録でそういうことが出ていることを、ほかからも注意をされたが、その点は十分な配慮をしないといけないと思う。ただ意見を聞くことはよいと考えたわけです。

次の10年以内の検討のときには、別の組織でやるべきだと思います。この総合科学技術会議のミッションに照してみても、他の政府機関の在り方を決めるとするのは余りないわけであり、ここは強く別の組織をつくってほしいということを行っています。

それから、論理にある程度の矛盾があるのは、承知の上で、現実的にこういう解決を選んだというところをお測りいただきたいと思う。

ほかに何かございますか。

【山路委員】 会長等を専任化するなど内部体制を整えることについてだが、これは学術会議自身でやるのか。会長を専任にすることは最初から決めてもいいのではないかと思う。

【井村会長】 これは私どもが決めるものではないと思う。これは学術会議と、現在学術会議の所属している総務省の間での問題であり、私どもは学術会議が社会的な役割を果たし、また科学技術の分野で適切な提言機能を果たしていく上には、少なくとも1人か2人の常勤職の人がいないとできないだろうということで、そういうことを書き込んだわけです。

【山路委員】 新しい学術会議では、是非それが実現してほしいと思う。

【三井委員】 今の専任化の問題は、私も希望しています。今までの議論では、もっとほかの組織論が多かったものですから、あえて申し上げていなかった。今の学術会議の大きな問題は、審議に時間がかかり、なかなか答えが出ないことと、社会とのコミュニケーションがなく、社会で求めている学術の課題が何かをキャッチする体制にないということです。これは、今の会員がすべて非常勤でありますから、なかなか難しいことです。

私の意見は、会長よりはむしろ副会長を専任化した方がいいということです。アメリカはNRCは会長が専任になっておりますが、会長は学術会議を代表するわけですから、専任にした方がいいのかどうかは疑問です。それよりはむしろ会長を補佐する副会長を専任化する、現在の2名を3名にして1名を専任化することが、先ほど申しましたような、社会が求めている課題が何であるかを常にキャッチし、審議をスピードアップするには適していると思う。特別委員会を設置して、その審議の状況をウォッチして、それを3か月であるとか、少なくとも半年ぐらいには答えを出すとか、そういうことをマネージする、そういう立場の専任者が是非必要だと考えます。

【井村会長】 ここはある程度委ねた方がいいと思う。会長等というようにあいまいな形で書いていますが、とにかく全部が非常勤では迅速な反応ができないから、そこを変えていくべきだということを書いたわけです。

【益川委員】 実際一期だけ参加したことがあります。そのとき感じたのは、提言なり何なりの活動をするときに、インフラが整ってない。例えば、会議室の確保に伴った日程調整の件や夜6時からの会議開始ということがあった。遠方から来る人間にとっては非常に不便でした。そういう意味で事務局の力、そういうインフラ、そういうものの支援がなければ私は何をやってもいまいかないと思う。非常にレベルが低い話ですが。

【井村会長】 インフラがどういう意味かが、ちょっと不明ですが、11 ページには一応事務局体制についての記載があって、もっと人材を広く集めて活用しなさいということは書いてます。結構たくさん職員はいます。総合科学技術会議と同程度はいるのではないのでしょうか。予算も向こうの方が多い。

【益川委員】 取り扱うレベルが、もう少し生々しいところなので、多分総合科学技術会議とは必要な規模が違うのだと思う。研連のようなものが十分な活動をしないことには、学術会議は成り立たない。そのときに研連が十分に働き得るものを用意したら、それなりのものが要るんだと思う。

【井村会長】 職員の質の改善や向上などが大事であって、数を増やしたらいい



いというものではないと思う。

【山路委員】 11 ページに外国人会員のことが書いているが、外国人を会員に入れなかったというのは、何か理由があるのか。

【三浦参事官】 石井先生が会長の際に、外国ではコレスポンディングメンバーになっているのが多いので、その一つとしてやったらどうかという御発案でした。

ここで「連携会員とするものとする」と、強めに書いてますのは、先ほど江崎先生のお話にもあったように日本学術会議には、他のアカデミーと違って、外国人が連絡会員としてもいないわけです。そこは改めた方がいいと思い、強めに書きました。

【山路委員】 外国のアカデミーでも、私もスウェーデンの科学技術アカデミーの会員だが、正規の会員とはやはり違う。よって、正規の会員には普通入れない方がいいと思う。

【井村会長】 ここは、フォリンメンバーなど、そういう形になると思う。

【江崎委員】 アカデミーというのは非常にナショナリズムの強いところで、どこのアカデミーも外国人は正会員にはしないということですが、そのトラディションをそのまま踏むか踏まないかということですが。

【井村会長】 ロイヤルソサエティーは区別してないです。

【江崎委員】 そうですか。

【井村会長】 イギリス人のメンバーと外国人のメンバーは区別してないと思います。

【江崎委員】 それこそ理想的な外国のまねするのでしたら、そこを理想と言うんだから、私は先ほどの文章も賛成しますけれども。

【井村会長】 ほかに、どうぞ。

【中根委員】 さっきの議論での 13 ページの最後の3行は、会長がお直しくださるということで結構だと思うが、これがないと次の続きがうまくいかないと思うので、よろしくお願ひします。

【井村会長】 ほかにいかがですか。

【大山議員】 私は、この調査会に初めて参加しますし、民間出身であり、こういう世界から随分遠いところでしたので、先生方のいろんな意見交換に関心を持って聞かせていただいた。率直な感想を申し上げさせていただいたが、本来こういう改革というのは自己革新というのが普通ではないかなというのが、率直な感想です。議論を積み重ねて、こうした筋道を立てて変革を促すというのは、いささか情けないというのが実感です。ただこれが現実であるのも直視しなければならぬということで、是非この提言にある方向で変革が加速していくことを期待申し上げたいと思う。

【井村会長】 ありがとうございます。日本では大学改革を見ても、何を見ても、一生懸命内部はやっています。当然学術会議も改革運動はやっていますが、外から見て満足できるような形になってこないことが大きな問題ではないかと思っています。

何も追加の御意見がなければ、この辺で締めさせていただきます。先ほどの修文はお任せをいただきたいと思います。

【田村委員】 学術会議の事務局体制のことだが、私はいろいろ経緯を伺っていて、官僚システムがある限り、日本では組織改革は難しいと受け止めた。10年後に、私達の提言として、独立の法人になることが望ましいということを考えると、学術会議会員の活動を支える事務局体制を改革する場合には、任期付きで科学者のキャリアを持つ人を多用して、従来のように公務員の事務局が国の機関を続けたいという仕組みとは違う、科学者コミュニティの意志を反映できる形のものに整えて行く事が大きな力になるのではないかという感想を持った。

【井村会長】 ありがとうございます。それでは、以上を持ちまして今日の会議を終わらせていただきます。

日本学術会議の在り方についての専門調査会は、本日で終了とさせていただきます。私は最後の瞬間だけこの会長を引き受けましたが、これまでは、主として石井前会長の御努力がありました。皆さんの御意向を十分にくみ入れることはできませんでしたが、これを第一歩として、これから日本学術会議が是非いい組織になってほしいを考えてます。10年ではなく、10年以内と言っており、できるだけ早い機会によりよい形に脱皮していただければと思う。

どうも長い間御協力ありがとうございました。

